

上野俊之丞のこと その3

3 上野彦馬につながる上野家の家業、そして薩摩藩との関係

「2 上野家の祖先」を一覧してもらおうとわかりますが、上野家の祖先についてまとめると、上野家はもと佐賀藩士であり、江戸時代の初めに長崎に移り住み、17世紀後半には河村若芝に師事して画家を家業とし、一時期は画業で佐賀藩に仕えていました。上野は屋号であり、18世紀には、唐人屋敷や出島に出入する地役人となり、山本姓を名乗っていた時期もありました。代々の画業とともに彫金にも優れた技術を持っていました。19世紀以降、上野彦馬の父俊之丞は、御用時計師幸野家を一時期継ぎ、画業はもとより、時計細工、硝石製造、更紗製造、彫金、鑄造に多才な才能を發揮していたということです。

その中で、薩摩藩から留学していた医者・松木雲徳と知り合いになったところから、薩摩藩と関係ができたようです。きっかけは雲徳の養子松木弘安（明治維新以後に寺島宗則と改名）が記した養父の履歴に次のようにあります。

「（天保4年）二月二十五日、上野俊之丞ニ依テ、長崎医王山延命寺相承院権僧正ヲ紹介シ、御室御所（仁和寺親王）ニ書ヲ通シテ、法橋法眼ノ階ニ叙セラレンコトヲ乞フ」（出典『寺島宗則関係資料』下巻所収「松木雲徳履歴書」）

すなわち天保4年（1833）2月に、医者であった薩摩藩士松木雲徳は法橋法眼の位をもらおうとして皇族が門跡（住職）として入る御室御所仁和寺へ、その末寺である長崎の延命寺を通じてお願いしようとしたとき、俊之丞が延命寺住職との仲介役を頼まれたということです。それがきっかけで、松木父子は一時期、銀屋町の上野家に寄宿するなど親しくなり、俊之丞の才能を紹介すべく、天保12年（1841）には一緒に薩摩まで行き、藩主と謁見することになります。



上野彦馬邸写真（父俊之丞の製煉所跡）
（長崎歴史文化博物館蔵）

「(天保12年)上野俊之丞ト共ニ鹿児島ニ来舶西洋機器薬物類製造ノ命ヲ受ク。六月一日城中ニテ御目見ノ礼ヲ述ス」(「松木雲徳履歴書」)

おそらく、薩摩藩がスポンサーとなり、俊之丞は中島川沿いに停車園と名付けた製煉所を開き、そこで煙硝の製造をはじめ、舶来した各種の西洋機器類の研究をすることになったようです。この事実がのちに、天保12(1841)年にダゲレオタイプのカメラを俊之丞が薩摩藩主斉興に献上したという「東洋日出新聞」の連載記事に結び付いたと思われませんが、実際はまだ輸入されていませんでした。そのとき松木弘安はまだ10才、松木父子は2年後の天保14年(1843)に長崎から鹿児島に引き上げていますので、2年ほどは俊之丞の近くで製煉所の様子を見ていたことでしょう。のち松木弘安(寺島宗則)は蘭学を修め、島津斉彬のもとで藩医となり、電信機を考案、写真撮影を行ったりしました。松木弘安は明治以降、外務官僚・外務卿として条約改正に尽力することになります。

製煉所は、松木父子が薩摩に引き上げた年に、長崎奉行所の直営になり俊之丞に経営が任されたということです(古賀「雑録」)。俊之丞の製煉所はのちの薩摩藩や佐賀藩の精錬所の魁となっています。

「上野俊之丞は、客を愛した。諸国の蘭学者が往々上野家の厄介になり、食客となつてゐた。俊之丞は、それらの蘭学者をよく引立ててやった。弘化から嘉永へかけて、陸中盛岡の大島高任や周防の手塚謙蔵などが、一時、俊之丞の宅に寓してゐた」(古賀十二郎「雑録」)

ここに見る上野俊之丞の停車園(製煉所)は蘭学塾とまでは言えないまでも、若い蘭学者が多く集まる場所であり、そこで学んだ人物はのちの西洋技術の導入に大きな粹割を果たしていきました。大島高任は、出身の盛岡藩に帰り、鉄鉱石を原料とした高炉を完成させ、鉄の街釜石のもとを作りました。その高炉趾は世界遺産「明治日本の産業革命遺産」の構成要素の1つとなっています。

上野俊之丞が嘉永4年(1851)になくなったとき、彦馬は13歳ですから、父から製煉所のことも、写真のこともおそらく何も教えられてはいないと思われませんが、彦馬がのちに撮影所を開いた場所は、父が作った製煉所の場所であり、その施設はまだ残っていたと思われれます。彦馬が日田の咸宜園で漢学を学んだあと、長崎に帰郷してポンペのもとで舎密学を学び写真に関わるようになるのは安政5年(1858)。四年後の文化2年(1862)に上野撮影局を開設しました。慶応2(1866)年に徳島藩からの留学生であった長井長義は、出発前から上野彦馬を頼るようと言われており、来崎後は上野家を訪ねてきました。中島川沿い

の彦馬邸では、撮影を頼む客だけではなく、他藩の留学生をも受け入れていました。長井長義の日記（『長井長義 長崎日記』徳島大学薬学部長井長義資料委員会、2002年）を見ると、彦馬は写真撮影に必要な薬剤を作ることを自ら試み、また写真とは直接関係ないものの、大砲の着火装置製造にも関わっており、それは父の存在と停車園なしには考えられないことだと思われます。

【長崎県文化振興課 山口保彦】